

# 朝鮮学会

## 第74回大会要項

会場：天理大学

2023年10月7日(土)・8日(日)

## 2023年度 第74回朝鮮学会大会プログラム

1. 日 時：2023年10月7日（土）・8日（日）

2. 会 場：天理大学

3. 大会プログラム

第1日 10月7日（土）

1) 公開講演 13:00～16:30（9号棟）

I. 朝鮮前期の「海禁」政策—船舶統制と沿海・島嶼部の居住規制を中心に—  
天理大学 教授 藤田明良氏

II. 韓国における対馬宗家文書と私の研究活動  
韓国翰林大学校国際問題研究所 研究教授 李 薫 氏

2) 総 会

第2日 10月8日（日）

研究発表会 9:00～

《(講) 非常勤講師 / (研) 研究員 / (院) 大学院生》

◆第1部門：語学分野（4号棟44A）

1. 9:00～9:30

同一の使役状況における単文から -ese 形節複文までの使役構文の分析

—認知主体の認知プロセスの観点から—

金沢大学（講）崔 ヨンア

2. 9:40～10:10

韓国語の時間的遠近の表現方法について：時点位置と時間間隔の関係性 京都大学（院）川 畑 祐 貴

3. 10:20～10:50

現代韓国語の平叙文における話ことばに現れる ‘한다体’ の知覚実験によるアプローチ

東京大学（院）鄭 恩 姫

4. 11:00～11:30

中国延辺朝鮮語の閉鎖音の音響特徴に対する実験音声学的研究

—若い世代の話者を中心に—

慶応義塾大学（講）許 秦

5. 11:40～12:10

延辺朝鮮語のアクセントの変化に関する一考察

—音節量及び分節音との関係性に着目して—

東京大学（院）國 分 翼

<昼食 12:10～13:10 >

6. 13:10～13:40

韓国国立中央図書館蔵『倭語類解』の校正について

仁荷大学校 許 仁 寧

7. 13:50～14:20

「単音節+하다」に関する通時的考察—形態と意味を中心に—

関西大学（院）黄 愛 真

8. 14:30～15:00

現代韓国語の話し言葉における親族名詞の用法について

東京外国語大学 南 潤 珍

9. 15:10～15:40

現代朝鮮語の“- 받다”, “- 당하다”による受動

—“- 되다”による受動との比較を通じて—

愛媛大学（講）崔 昌 玉

10. 15:50～16:20

韓日韓国語評価論研究—文化項目の分析を中心に—

釜慶大学校 周 賢 熙  
釜慶大学校（講）植田明日香

11. 16:30～17:00

「-을게」文で表される行為要求の下位範疇についての一考察

—命令の「-어/아라」文との比較を中心に—

北海道大学（院）高 先 慶

◆第2部門：文学分野（3号棟 32D）

1. 9:00～9:30  
韓国ナラティブにおける親族呼称 法政大学（講） 吉良佳奈江
2. 9:30～10:00  
『漢城新報』創刊時期と『九州日日新聞』の記事について 拓殖大学 伊藤知子
3. 10:00～10:30  
物語から見る関東大震災—日韓の違う視線から描かれた関東大震災— 中央大学（研） 劉銀炅
- <休憩：10:30～10:45>
4. 10:45～11:15  
宙吊りの生活：朴泰遠「自画像3部作」読解 専修大学（講） 相川拓也
5. 11:15～11:45  
尹東柱の自筆詩稿から見る漢字の特徴とその効果 東京外国語大学（院） 金雪梅
- <昼食：11:45～13:00>
6. 13:00～13:30  
金芝河と韓国演劇—1970年代日本演劇の新たな他者として— 早稲田大学（講） 金牡蘭
7. 13:30～14:00  
第三世界文学としての「民族文学」論とポストコロニアリズム  
：二つのポストコロニアルの競合と錯綜をめぐって 京都大学 夫鍾閔
- <休憩：14:00～14:10>
8. 14:10～14:40  
古典童謡の解釈方法 慶熙大学校 岡山善一郎
9. 14:40～15:10  
高橋亨の朝鮮文学研究と今後の発展について 近畿大学 山田恭子

◆第3部門：歴史学・考古学・文化人類学・その他の分野（3号棟 32C）

1. 9:00～9:30  
朝鮮半島をめぐる蘇木の道—15世紀における朝明間の流通を中心に— 九州大学（院） 洪寅植
2. 9:30～10:00  
17・18世紀の朝鮮農業水利の発展—水稻灌漑移植法と小農民— 本会会員 菅野修一
3. 10:00～10:30  
講信参判使から見える近世日朝関係 舞鶴工業高等専門学校 牧野雅司
- <休憩：10:30～10:45>
4. 10:45～11:15  
啓明大学校所蔵『續三綱行實圖』について 東京大学 澁谷秋
5. 11:15～11:45  
植民地朝鮮社会における胎教と母性言説—「女性教育論」「民族改造論」「朝鮮学'振興運動」との  
絡み合いを中心に— 奈良文化財研究所 扠素妍
- <昼食：11:45～13:00>
6. 13:00～13:30  
崔鉉培の思想形成における京都帝国大学哲学科の位相  
—『朝鮮民族更生의道』を中心に— 東北学院大学 関東曄
7. 13:30～14:00  
韓国ドラマから見るジェンダー意識への向上 福岡大学 羅義圭

公開講演

朝鮮前期の「海禁」政策  
—船舶統制と沿海・島嶼部の居住規制を中心に—

天理大学教授 藤田明良

# 韓国における対馬宗家文書と私の研究活動

韓国翰林大学校国際問題研究所 研究教授 李 薫

# 1. 同一の使役状況における単文から -ese 形節複文までの 使役構文の分析 — 認知主体の認知プロセスの観点から —

金沢大学(講) 崔チョンア

典型的な使役状況とは、使役者が何かをすることで ( i ) [被使役者がある状態にある] ように引き起こす状況、又は、( ii ) [被使役者がある行為をする] ように仕向ける状況を指す。一方、Shibatani(2006)のヴォイス現象における「行為の発達」の観点を本研究の使役状況に合わせて捉えなおすと、①使役主体の意志性、②(被使役主体への)働きかけ、③被使役主体の結果、の大きく3つの段階に切り分けて考えることができる。

以下、(2)～(5)の構文は、全てが「母親が庭の手入れをしようとする(①使役主体の意志性)」「息子と呼ぶ(②働きかけ)」「息子が庭の手入れをする(③被使役主体の結果)」という同一の使役状況からなる広義の使役構文であると言える。しかしながら、以下のような単文や複文は、埋め込み文や結合価の関係など、従来の形式と意味からなる対応に重点をおいた分析では説明できないものである。

- (1) 어머니가 (自分で) 정원손질을 했다.
- (2) 어머니가 (息子を呼んで) 정원손질을 했다.
- (3) 어머니가 아들을 불러서 정원손질을 했다.
- (4) 어머니가 아들을 불러서 정원손질을 시켰다.
- (5) 어머니가 아들 {에게 / 을} 정원손질을 시켰다.

他方、認知言語学におけるメトニミー(換喩)の研究は、語や述部レベルに焦点を当て分析された従来の研究から、近年では文や談話レベルで分析を行うことで、文の意味と話し手の意図や聞き手の解釈との関連性も含めて研究されるようになった(山梨 2004, 崎田・岡本 2010)。本研究では、以上のような構文から表れる使役状況の連続性は、文レベル、あるいは談話レベルのメトニミーの連鎖という認知プロセスであると主張する。すなわち、本研究は、同一の使役状況に基づき言語化される一連の使役構文に対し、文レベルや談話レベルで参照点構造を構築させ、その言葉の背後に存在する認知主体(話し手、ないしは聞き手)の意図や見方をメトニミーの観点からその認知プロセスを究明することを目的としている。

## [引用文献]

崎田・岡本(2010)『言語運用のダイナミズム』/Shibatani(2006)“On the Conceptual Framework for Voice Phenomena”/Lakoff and Johnson(1980)“Metaphors We live by”/山梨(2004)『ことばの認知空間』

## 2. 韓国語の時間的遠近の表現方法について ：時点位置と時間間隔の関係性

京都大学(院) 川畑 祐 貴

従来の韓国語の時間語彙分類において、時点位置の表示に関わり得る形式を時間的段階性、程度性（基準時点に対してどの程度過去 / 未来、あるいは以前 / 以後であるか）の観点から捉えることは稀で、민현식 (1990, 1998) などを除いては、目立った言及は見られない。민현식 (1990, 1998) は時点位置を表示する時間語彙の下位分類として、「発話時や事件時現在を基準とし、一日の中で遠くない過去と未来の時点を示す」「直前過去語」と「直後未来語」という区分を設定し、該当形式を複数提示した(민현식 1998: 343)。しかし、そのような分類をみると「直前 / 直後ではない時点を表示する形式は時間語彙体系の中に存在しえないのか」、「基準時点の直前 / 直後ではない時点（基準時点から近くない、あるいは遠い時点）はどのように表されるのか」などの疑問が生じる。

そこで、本発表では韓国語の時間表現を対象に、時間的近さと時間的遠さの表示に関する特徴や差異について分析する。それぞれの表現方法についてまとめたものが以下である。

### 【時間的近さ】

- ・名詞・副詞（例：갓, 막, 방금, 금방などの単独形式）による明示的または含意的な表示（川畑 2022）
- ・形容詞（例：가까운 미래）や派生副詞形（例：빨리）、程度を表す名詞・副詞（例：조금 전）、数詞などを用いた時間間隔の「長さ」の表示 など

### 【時間的遠さ】

- ・文法形式 - 았 / 었 - による表示（過去の場合のみ）
- ・名詞・副詞（例：옛날, 훗날などの複合形式）による明示的または含意的な表示
- ・形容詞（例：먼 미래）や程度を表す名詞・副詞（例：한참 뒤에）、数詞などを用いた時間間隔の「長さ」の表示 など

韓国語の時間的遠近の表示に関して、近さを表す場合、時点位置の表示を担う時間語彙が一定の近さニュアンスを語彙意味の一部として、あるいは含意として有する例が見られる。一方、遠さを表す場合、遠さニュアンスを積極的に含み持つ時点位置の表示語彙は数が多くない。その代わりに、文法形式による表示や時間間隔の「長さ」への修飾を介して遠さニュアンスが表されうる。時間的遠近のニュアンスを（語彙的に）表す場合、時点位置を表す形式が時間間隔に対する評価も含みうるのか、時間間隔に対する評価は別途表すのか、という点で差異が見られる。

この結果は時点位置と時間間隔が概念的に、また言語表現上どのように関係しあうのかを改めて考える契機を与える。時点位置を表す表現と時間間隔を表す表現はそれぞれテンポラリティとアスペクチュアリティに関連付けて扱われることが多いが、時間的遠近、つまり時間的段階性、程度性の観点から表現を捉えることで、時間的距離や時間間隔という概念が範疇の違いをこえて偏在的でありうること（Zeman 2015: 3）、時点位置と時間間隔の構造的な関係、また言語表現としての現れ方の傾向などが示されることとなる。

### 3. 現代韓国語の平叙文における 話ことばに現れる ‘한다体’ の知覚実験によるアプローチ

東京大学(院) 鄭 恩 姫

筆者は XXX(2023) において、話ことばの平叙文に現れる ‘한다体’ (以下、書きことばと区別するため、‘한다形’ と呼ぶ) の意味を分析し、「情報提示」「嘲笑」「戸惑」「意外」「自慢」「決心」「発見」「不満」「脅し」「感嘆」に分類した。また、各々の意味に伴う音声学的様相を Praat (Boersma & Weenink 1992-2022) を用い、検証した。

本稿では、XXX(2023) の研究結果に基づき、‘한다形’ のうち①「自慢」(M%)、②「発見」(H%)、③「意外」(LH%)、④「不満」(LHL%)、⑤「決心」(HLH%) を対象に、知覚実験を行う。

이호영 (1996,1999), Jun(2000), 신지영 (2017) が示すイントネーション句境界音調とその機能について比較すると、XXX(2023) のイントネーションパターンは、이호영 (1996,1999) の報告と類似しており、‘한다形’ が一定の音調で現れるという現象を支持すると言える。管見の限り、これらのパターンについて知覚実験を行った研究はない。

本研究の被験者は、ソウル母語話者の 20 代の男女 1 名である。

音声資料は、全てのセグメントが共鳴音になるように考案し、イントネーションの違いだけで意味が弁別できるようにした。ソウル母語話者である筆者の音声を録音し、Praat を用いてこれらが異なる音調パターンで現れることを確認した。被験者には、音声資料の内容を説明し、1 セット(①~⑤)を 3 回、ランダムに聞かせた。

その結果、男性は ‘한다形’ の 5 つの意味を 100% 正確に知覚していた。女性も高い正確性で意味を分類していた。これらは、‘한다形’ のそれぞれの意味が一定の音調パターンと相関性を持つことを支持する結果である。但、女性は「不満」(LHL%) → 「意外」(LH%)、 「意外」(LH%) → 「不満」(LHL%) とも答えた。Jun (2000;216) は、LHL% について音調パターンが LH% に類似し、LH% は LHL% のように「귀찮음」「짜증」の意味を示す場合があるとする。女性のデータはこれらの指摘と関連しているかもしれない。

今後、より多くの母語話者を対象とした実験を行うことにより、どれほど母語話者が ‘한다形’ のこれらの音調パターンを正確に知覚しているか、確認を進める。

#### [ 参考文献 ]

이호영 (1996) “국어 음성학”, 서울: 태학사.

이호영 (1999) ‘국어 핵역양의 음향음성학적 연구’, “말소리” 38: 25-39.

신지영 (2017) ‘구어에서 운율 표지와 형태 표지의 분포와 기능’, “한국어학” 77: 37-63.

Jun, S. A.(2000), K-ToBI (Korean ToBI) Labelling Conventions (version 3.1), “음성과학” 7-1: 143-169.



## 4. 中国延辺朝鮮語の閉鎖音の音響特徴に対する 実験音声学的研究 —若い世代の話者を中心に—

慶応義塾大学（講） 許 秦

本研究は、現在中国延辺朝鮮族自治州において中国朝鮮族が使用している朝鮮語の閉鎖音を対象に、実験音声学、とりわけ音響音声学的にその音響特徴を明らかにすることを目的としている。

延辺朝鮮語の閉鎖音に対する実験音声学的な研究は、他の音素及び音韻現象を対象としたものに比べると、わりと多く行われているが、同時に課題も多く残されている。したがって、本研究では、延辺朝鮮語若い世代の話者による閉鎖音の音価を、従来の研究による結果と照らし合わせながら、統計分析も加え、考察が足りなかった部分に対する議論を補うことにした。その結果、以下のような点をまとめることができた。

まず、延辺朝鮮語若い世代の話者が発音した閉鎖音を全体的にみると、VOT(voice onset time)の長さによる違いは激音と平音、激音と濃音の間には残っているが、平音と濃音の間にはその違いがなくなっており、これは先行研究の記述と一致している。しかし、個人レベルにおいては、平音と濃音のVOTの長さによる違いは未だ保たれており、延辺朝鮮語若い世代の話者は平音と濃音のVOTの長さにおける違いをある程度意識していることを意味する。

次に、全体的にF0(基本周波数)が三種類の閉鎖音の区別において、有意な働きを示さない。これは、延辺朝鮮語が元々ピッチアクセント体系を持っており、ピッチが変わるだけで意味が異なる場合もあるので、アクセントを三種類の閉鎖音の区別まで、その機能を拡張していくのが難しいからであると思われる。

更に、語頭に於ける平音と濃音の区別はVOTの長さではなく、H1-H2(voice quality)が重要な役割を担う。これは先行研究で言及した通りであるが、一部のインフォーマントからのデータで、例外的なものも出てきており、H1-H2だけで語頭の平音と濃音の区別を記述するのは適切ではないと言える。

尚、非語頭音節に閉鎖音が置かれる場合、非語頭音節の平音と濃音の区別において、H1-H2が有意ではなく、その代わりにCD(closure duration)が両種類の閉鎖音を区別するのに役立つ。

最後に、三種類の母音 / ㅏ /, / ㅣ /, / ㅓ / が閉鎖音に後続する際、それぞれにおける閉鎖音のVOTの長さの様相を観察した。その結果、母音 / ㅏ / が閉鎖音に後続する場合、そのVOTが一番短く、/ ㅣ / と / ㅓ / が後続する場合、そのVOTがより長く実現される傾向が見られる。

## 5. 延辺朝鮮語のアクセントの変化に関する一考察 —音節量及び分節音との関係性に着目して—

東京大学(院) 國 分 翼

延辺朝鮮語は朝鮮語東北方言を基層とした変種であり、故にアクセントの対立が存在し、その体系は中期朝鮮語に対応していることはよく知られている。しかし近年では、アクセントの合流により、古い体系が崩壊しつつある。本発表では、延辺出身の朝鮮族3名に調査した1~2音節名詞のアクセントを対象にその実現様相を分析し、型が保存されている語について、音節量及び分節音による傾向がみられることを指摘する。

朝鮮語のアクセントと音節量及び分節音の関連性についてはこれまでも言及されてきた。そのうち、Ito(2013)では、中期朝鮮語について、音節量によってそれぞれのアクセント型の現れやすさの傾向が見られることが述べられている。また、現代朝鮮語方言については、東南方言に関する言及があり、Kim(1997)では、慶北方言について、末音節が重音節のとき、末音節にアクセントが置かれる一方、末音節が軽音節のときは次末音節にアクセントが置かれるのがデフォルトであるとした。また、辻野(2021)は大邱方言を対象にアクセントと音節量及び分節音の関係性について分析しているが、1音節語については最小対(minimal pair)の存在を考慮すると、開音節語は基本的にH(H)で現れるとし、3音節語固有語名詞は基本的にはLHLで現れるが、「開開閉」という音節配列の語はLLHで現れる傾向があり、重音節へのアクセントの移動が起こったと考えられるとしている。諸方言においてこうした関連性が見られるため、延辺朝鮮語のアクセント変化においても一定の傾向が存在するのではないかと考えた。

分析結果は次の通りである。①1音節語、2音節語共に、無核の語(L型、LL型)は先行研究に比べて著しく減少しており、語末アクセント型(H型、LH型)への合流が進行している。②1音節名詞のうち、中期朝鮮語時代に平声で現れた語について、(1)母音が低母音である語(2)末子音が阻害音であるものはL型が保存されやすい傾向にある。③2音節名詞のうち、LL型は末音節が軽音節の時に現れにくく、特に重軽構造で現れた例は1例もなく、この型が早く他の型に合流が完了した。一方、末音節が重音節かつ末音が阻害音であるときにLL型が保存されやすい。また、HL型は、重軽構造のときに現れやすい傾向にある一方、末音節に重音節があるときには現れにくい傾向にあり、中期朝鮮語で「去○」型であったこれらの語の多くがLH型に合流した。つまり、重軽構造ではHL型が保存されやすい一方、末音節が重音節のとき、HL型が保存されず、LH型に早く合流する傾向にある。

### [参考文献]

- 辻野裕紀(2021)『形と形が出合うとき—現代韓国語の形態音韻論的研究』,九州大学出版社。  
Ito, Chiyouki(2013) “Korean accent: Internal reconstruction and historical development” , *Korean Linguistics*, 15-2, International Circle of Korean Linguistics, pp.129-198.  
Kim, No-Ju(1997), *Tone, segments, and their interaction in North Kyungsang Korean: A correspondence Theory account*, Ph.D dissertation, The Ohio State University.

## 6. 韓国国立中央図書館蔵『倭語類解』の校正について

仁荷大学校 許 仁 寧

『倭語類解』は、朝鮮時代の訳官養成期間であった司譯院関係者の手によって作られた日本語語彙集である。1780年代に刊行されてまもなく日本にも伝わり、対馬や薩摩などでは朝鮮語学習書として写され、1835年にはイギリスの宣教師の手によって英語に翻訳され、その後の西洋人の朝鮮語学習や辞書などに多大な影響を与えた。

これまで『倭語類解』についてのほとんどの書誌学的研究は、韓国や日本に伝わっている伝本についての、基礎的な形態書誌の記述にとどまることが多かった。最近にはイギリスにも『倭語類解』の伝本があるのが確認され、また諸伝本の書誌や流伝にも新しい研究がなされている。これまで学界に報告された『倭語類解』の伝本は、次の3つである。

1. 日本・駒澤大学図書館濯足文庫蔵本（金沢庄三郎旧蔵）
2. 韓国・国立中央図書館蔵本（李命和（倭学訳官）・橋辺氏旧蔵）
3. イギリス・マンチェスター大学ジョン・ライランド図書館蔵本（シーボルト旧蔵）

この中で、本研究の対象となるのは、2の韓国国立中央図書館蔵本（以下「国図館本」）である。内容書誌の上から見て、国図館本には日本人の手によると思われる校正が、全巻にわたって施されている。この校正について、先行研究でも認識はあったが、詳しく検討されたことはなかった。国図館本の校正は、次のように様々な類型に及んでいる。

悪：아구 → 악, 電：덴 → 옰, 母：뽀우 → 뽀, 頭：가미 → 아다마, 大：오오이 → 오희이

この校正の内容から、19世紀半ばの日本人が日本語のハングル表記をどのように理解していたかを分けることができる。さらに、当時の日本語の音声・音韻的特徴を捉えることも可能であろう。また、前近代時期の韓国における外国語教育についての研究が盛んなことに対して、日本における韓国語教育についての研究は、資料の不足によって相対的に研究が進んでいなかった。本研究によって、前近代時代の日本における韓国語教育の実態についてより理解を深めることができると思われる。

## 7. 「単音節+하다」に関する通時的考察 —形態と意味を中心に—

関西大学(院) 黄 愛 真

本研究は、中世～現代における「単音節+하다」を対象とし、形態と意味の様相を通時的に考察することを目的とする。

現代朝鮮語において「単音節+하다」は「多音節+하다」に比べると使用が多くない。안예리 (2013)によるとコーパス分析を通じて「1音節漢字語+하다」を調査した結果、15～19世紀の文献の用例では88%を占めていたものが、現代の用例では12%に過ぎないと提示している。한영균 (2008)(2009)では近代と現代の文献におけるコーパス分析を通じて「1音節漢字語+하다」の使用率を比べてみた結果、現代になりつつ、使用率が減ることから、近代と現代の時代史の区別ができる証拠としてみていいだろうと述べていた。以外にも「単音節+하다」に関する通時的な先行研究は방영심 (2012), 장회견 (2013), 강현주 (2020) などがあるが、大体2010年代の研究が多く、今まであまり言及されたことのない領域のものだと思われる。ちなみに、先行研究は動詞や形容詞に限り、「1音節漢字語+하다」だけを対象として扱っている。

本研究では、「単音節+하다」をテーマとし、「単音節+하다」の漢字語(動詞、形容詞を全部含む)だけではなく、「単音節+하다」の固有語まで幅広く扱っている。主な研究対象である語彙リストは辞典的形態・意味を基準としている。中世～近代語における語彙リストは 유창돈 (1964) 『李朝語辞典』、남광우 (2011) 『古語辞典』から、現代語における語彙リストは韓国国立国語院の「標準国語大辞典」から収集し、中世から現代における「単音節+하다」の形態と意味の総合的な様相について通時的な考察を行った。

中世～近代語を基準とし、現代語との様相を比べてみた結果、<同様><変化><消滅>の三つの種類として現れた。まず、<同様>では中世から現代に至るまで語幹の形態も同様で、意味も同様である語彙を扱ったが、その数が約半分であることがわかった。特に“고(告)하다”、“명(命)하다”、“변(変)하다”のように漢字語の出現がもっとも多かった。中世から現代に至るまで生き残ってきた語彙の数は多くないが、形態・意味が同様である語彙が多いのは漢字語の影響があったのではないと思われる。

次は形態や意味の<変化>に関しての特徴である。形態変化では“강(講)하다”→“강의(講義)하다”のような‘2音節への変化’がもっとも多かった。その他は‘語幹の変化’、‘接詞の変化’、‘固有語への代替’、‘他語彙への代替’などであった。例を一つ挙げると、中世～近代語の“성하다”は漢字語と固有語による同音異義語であったが、漢字語の場合は‘語幹の変化’を経て“성(盛)하다”→“성하다”として現存している反面、固有語の場合は、“성하다”→“신선하다”の他語彙へ代替された。この他の例からにも漢字語に比べ、固有語の方が形態変化や意味変化がより激しいということが分かった。意味変化では形態変化の結果を用い、‘意味派生’、‘意味拡大’、‘意味縮小’、‘意味転移’という項目としてまとめた。

最後に<消滅>では数は多くなかったが、“관(冠)하다”のように歴史的な背景を原因とし、形態と意味を同時に失い、時代的な流れによって自然に消滅した語彙も扱った。

発表においては、<同様><変化><消滅>として現れた中世～現代における「単音節+하다」の語彙の様々な例とともに詳細に分析した内容について報告する。

## 8. 現代韓国語の話し言葉における親族名詞の用法について

東京外国語大学 南 潤 珍

本発表は、韓国語の話し言葉コーパス及び小説テキストを対象に親族名詞の分布を調査し、その用法を記述するものである。

本発表で取り上げる親族名詞の用法は以下のようなものである。

1) 親族名詞の虚構用法について：어머니, 오빠, 남편, 아줌마など、血縁や婚姻によって形成された人間関係の人を指し示す親族名詞は、語彙論や社会言語学の観点からその語彙体系や意味関係が記述されてきた。社会・家族関係の変化に伴って親族名詞の使用範囲・意味関係にも変化が起きていると指摘する研究が目立つが、その多くは研究者の経験に基づくものである。特に親族関係ではない人を親族名詞で表す現象(虚構用法)が注目されているが、本発表では、20世紀の小説テキストにおける親族名詞の虚構用法の推移を調べることで、より客観的・網羅的な記述を試みる。

2) 親族名詞の人称用法について：韓国語の人を表す名詞は、会話の中で話し手や聞き手のことを指し示す場合が多く、印欧語の人称代名詞のような用法を持っているとの指摘がなされており、「代名詞代用」と呼ぶこともある。本発表では、人を表す名詞のうち親族名詞を対象に、その自称・対称・呼称の用法の話し言葉コーパスにおける分布を調査・報告する。

## 9. 現代朝鮮語の“- 받다”, “- 당하다”による受動 — “- 되다”による受動との比較を通じて—

愛媛大学(講) 崔 昌 玉

現代朝鮮語には他動を受動に派生する方法として、他動詞の語幹に“- 이 -, - 히 -, - 리 -, - 기 -”等の接尾辞(以下, ヴォイス接尾辞と略す)を付ける派生, 漢字語などに付いた“- 하다”を“- 되다, - 받다, - 당하다”等に変えて付ける派生(以下, 疑似接尾辞と略す), 他動詞の語幹に“- 아 /- 어 지다”を付ける派生(分析的な形)がある。本発表の目的はこれらの派生のうち, 疑似接尾辞による派生に焦点を当て, 疑似接尾辞“- 되다”, “- 받다”, “- 당하다”との類似点と相違点を明らかにすることである。

疑似接尾辞“- 되다”, “- 받다”, “- 당하다”による派生を取り扱った先行研究には, 서정수(1996), 우인혜(1997), 이정택(2004)等々があるものの, ヴォイス接尾辞による派生を取り扱った先行研究ほど多くない。というのも, 先行研究では, ヴォイス接尾辞による動詞の派生が典型的な受動であるのに対して, 疑似接尾辞による動詞の派生が受動表現であると考えているからである。しかしながら, 本発表はこれに異議を唱えるものである。その大きな理由は, ヴォイス接尾辞による派生は動詞が限定され, 生産的でないが, 疑似接尾辞による派生は生産的であるからである。

本発表は우인혜(1997:267-288)で提示した付録を基に, 漢字語に疑似接尾辞が付いた場合を考察の対象とする。本発表の考察を通じて, 例えば, (1) 漢字語“감시(監視)”のように疑似接尾辞“- 하다, - 되다, - 받다, - 당하다”全てを伴うことができるもの, (2) 漢字語“예약(予約)”のように疑似接尾辞“- 하다, - 되다, - 받다”を伴うもの等々があることが判明している。

形態論的レベルでは, 漢字語がどの疑似接尾辞を伴い, 受動を表すかは, その漢字語本来の意味によるところが大きいので, 本発表では, これを考察対象としない。本発表が重要視するのは統辞論的レベルと意味論的レベルである。例えば, 疑似接尾辞“- 받다, - 당하다”の派生において“그 선생님은 학생들에게서 존경받았다.(その先生は多くの学生に尊敬された。)”や“저는 그녀에게 이용당했다.(私は彼女に利用された。)”のように, 動作の主体が“에게서”や“에게”で明示されることが多い。格助詞“에게서”が文に現れる場合は, “저는 그녀에게서 선물을 받았다.(私は彼女からプレゼントをもらった。)”のように, 授受を表す文と共通する点がある。先行研究でも指摘していることではあるが, 本発表では, これは“받다”本来の意味によるところが大きいところを指摘する。【統辞論的レベル】。また, 本発表では, 疑似接尾辞“- 받다”, “- 당하다”による派生は動作の主体が人で, 動作の客体が人である場合が多いことも指摘する。【意味論的レベル】

## 10. 韓日韓国語評価論研究 —文化項目の分析を中心に—

釜慶大学校 周 賢 熙

釜慶大学校（講） 植田明日香

最近、韓国文化に対する関心が世界的に高まり、韓国語教育はもちろん、韓国文化教育への関心も高まっている。様々な韓国文化教育と関連した教材が刊行されており、韓国の大学はもちろん日本の大学内でも教養および専攻科目で韓国文化の教科が開設されている。

目標言語国家の文化を理解することは、目標言語教育の理解及び習得の向上において重要な役割を果たすといえる。芸術、文学、演劇、映画などの文化だけでなく、最近では韓国の日常生活と関連した生活文化に至るまでその関心が広がっている。多くの韓国語教材でもこれを反映し、韓国の出前、夜食文化、アプリケーションやメッセージを活用した言語文化などを教育内容として扱っている。

本研究では、このような現象に着目し、韓国語評価ツールの読解テキストに現れる文化項目を研究しようと思う。

始めに韓国語能力試験 (TOPIK)、ハングル能力検定試験、日本の大学入試であるセンター試験の韓国語試験を研究対象とし、比較分析する。そこで韓国語習得度を評価する主要評価ツールの特徴を概観する。特に最近、韓国文化に対する関心度が高まったことが文化教育内容および韓国語評価ツールの文化項目の構成にどのような影響を及ぼしたのかを中心としてみてみたい。また、大学機関で教育した文化内容が評価にどのように反映されたかを窺うため、韓国と日本で刊行された韓国文化教材 4 種を研究対象とし、その文化教育の内容を調べ、文化項目を分析する。

そのため、まず先行研究の文化項目分類基準と「国際通用韓国語教育標準模型」(2010) の文化領域の等級別目標を参考にし、分類基準を設けることとする。これに基づいて、読解テキストと文化教材に現れた文化項目进行分类する。

このように、韓国語評価ツールの読解テキストと韓国文化教材で取り扱っている文化項目をまとめ、文化項目を再び細分化して分析することで、読解テキストと韓国文化教材での文化項目が時代を反映し、どのように変化していくのかを考察することができると思われる。

本研究を通じて韓国文化に対する高い関心度が韓国語評価ツールはもちろん、韓国文化教材にも影響を及ぼしたことが明らかになることだろう。また、読解テキストに文化項目が増加し、K-POP、K-ドラマのような韓国の現代文化はもちろん、日常生活文化にまで文化項目の種類も幅広く扱われていることが分かると思われる。





# 1. 韓国ナラティブにおける親族呼称

法政大学（講） 吉良佳奈江

韓国語には複雑な親族呼称がある。今回の発表では、これまで日本語に訳された小説、シナリオブックとそれらの原著、日本で公開された映画、また作者や監督の発言を通して親族呼称の表す意味を検討したい。

例えば「オッパ」という単語は1. 家族関係において、妹から見た兄／2. 女性から見て兄のように親しく信頼できる男性、近所の親しい友人や学校や職場の先輩など／3. 女性から見て恋愛対象である年上の男性、恋人、夫、と定義でき、K-popのファンが男性アイドルを「オッパ」と呼ぶのも3の用法だと考えられる。

実の兄を表す「オッパ（오빠あるいは친오빠）」は、家庭内において家父長を代理する権力者であり、その力関係はときに暴力となって現れる。映画『はちどり』（キム・ボラ監督、2018 = 2020）、には主人公のウニの兄とウニの母親の兄が登場するが、前者は暴力的な兄であり、後者はふがいない兄として描かれる。ウニの親友のジスクも兄からの暴力を受けている。チェ・ウニョンの「六〇一、六〇二」（2017 = 2020）でも少女の視点から友人が兄から受ける凄惨な暴力が語られる。また、チェ・ウニョンは『はちどり』のシナリオブックにエッセイを寄せている。

次に実の兄以外を「オッパ」と呼ぶ2. の定義の中で、日本では聞きなれない「教会オッパ」を挙げたい。韓国では教会の活動に熱心でリーダー的な若い男性を「教会オッパ」と呼ぶ。また、「礼儀正しくきちんとした優しい男性を比喩的に表す」言葉でもある。イ・ギホの「誰にでも親切な教会のお兄さんカン・ミノ」（2014 = 2020）は、タイトルの通り「教会オッパ=教会のお兄さん」に焦点を当てた作品で、「教会オッパ」という単語は英語では Church Guy と訳されている。カン・ミノの後輩男性の視点から、恋人のユニが旅行先のインドネシアで突然イスラム教に傾倒していく様子と、かつて彼女が同じ教会に通うカン・ミノを慕っていたことが語られる。ユニの感情的な言葉から、キリスト教から離脱した原因がカン・ミノにあることを示唆して終わる。この作品は、無害であるはずの「教会オッパ」が加害者になりうること、「オッパ」という言葉に、実際には恋愛に発展する可能性が含まれていることを示している。兄弟を表す親族名称が同性間の恋愛対象にも使われる例を、先行研究とともにパク・サンヨン小説家、キム・ボラ監督のインタビューから検討する。

最後にチョ・ナムジュ著、斎藤真理子訳『82年生まれキム・ジヨン』（2016 = 2018）とその映画化（2019 = 2020、キム・ドヨン監督）を分析対象として、結婚してからも夫を「オッパ」と呼ぶ二人の関係性を検討したい。物語のなかでジヨンには母親や祖母が憑依して、夫に説教する。この憑依状態が「オッパ」と呼ぶ関係性から抜け出して対等の立場で話すための装置となっていることを、人類学的な視点で同じ東アジアのモンゴルでの現象と比較検討する。

## 2. 『漢城新報』創刊時期と『九州日日新聞』の記事について

拓殖大学 伊藤知子

本発表では『漢城新報』の創刊時期についてと旅行日誌「朝鮮内地旅行日誌」について考察する。

一つ目は、『漢城新報』の創刊時期についてである。『漢城新報』は1895年2月に日本人によって朝鮮で創刊された新聞であるが、創刊時の原本が存在しないため確認はできていない。創刊時期については1894年1月とする説や、11月とする説も存在する。これを確認するために『漢城新報』と密接な関係を持っていた『九州日日新聞』の記事を調査した。以前発表者は『漢城新報』から送られてきた記事の一部がそのまま転載されていたことを明らかにしているためである。

もう一つは、今回『九州日日新聞』の記事をさかのぼることで佐々正之の旅行日誌の記事をみつけたので(1894年7月、10月に掲載(計12回))、これを紹介する。タイトルは「朝鮮内地旅行日誌」で一面トップ記事として掲載された。発表者は佐々の記事は『漢城新報』から送られてきた記事の中で、『九州日日新聞』に最も多く掲載されたと考えている。しかしこれだけ連日一面トップ記事として扱われた記事は珍しい。内容は佐々が送っていた「朝鮮通信」とは異なり、自ら体験した記録を伝えるものである。『九州日日新聞』のトップ記事として掲載された理由と佐々がこの記録から日本の読者に伝えようとしていたことは何であるのかについて考察する。

### 3. 物語から見る関東大震災 —日韓の違う視線から描かれた関東大震災—

中央大学政策文化総合研究所（研） 劉 銀 旻

2022年に公開したアニメーション「すずめの戸締まり」では100年前に起きた地震と同じ規模の地震が起きることを防ぐ場面がある。その100年前の地震というのが関東大震災である。現代日本人の記憶の中で最も被害の大きかったのが関東大震災であり、だからこそ何より大きな規模の地震として「すずめの戸締まり」で関東大震災が描かれていたのであろう。近年でも1995年には阪神淡路大震災、2011年には東日本大震災があり、そのたびに「今度の経験を反面教師とする」などの声が上がリ、関東大震災の記憶が呼び起こされる。東日本大震災の後、ある研究者は今後起きえる首都直下地震や南海トラフ地震などに対し、関東大震災の時の「文豪たちの証言には必ずや学ぶべき教訓がある」と述べ、文豪たちが綴った関東大震災の体験記を出版<sup>1</sup>しており、またある研究者は関東大震災を体験した表現者たちの「記録」を「いつまでも「記憶」し続けていこうとする姿勢と工夫が必要<sup>2</sup>」と述べている。実際に芥川龍之介をはじめ田山花袋、泉鏡花、島崎藤村、宇野浩二、室生犀星などの文豪が地震からの喪失感や不安、崩れ落ちた街の様子を綴っている。しかし、関東大震災から100年が過ぎた現在において、歴史上の出来事であるということ以外に歴史の教訓として残されているのは何だろうか。「すずめの戸締まり」でも東日本大震災と同じ過去の被害が大きかった地震としてしか描写されていない。自然災害としての被害はどうすることもできなかったが、流言飛語により多くの朝鮮人や社会主義者が虐殺されたことは繰り返されてはならない事実として伝えるべきであるのに、それに関しては日本で制作された映像作品では描かれない。2022年にネットフリックスで配信されたドラマ「パチンコ」は、原作小説にはない部分が描かれている。登場人物の一人であるハンスの青年時代がちょうど関東大震災の時と重なり、父の死と流言飛語によって虐殺される朝鮮人の姿が描かれている。日本のものでは最近関東大震災を背景にしたアニメーション「大正オトメ御伽話」があるが主人公が東京で最愛の人を探し回る時に流言飛語に関しては言及されず、助け合う人々の姿ばかりが描写される。ある歴史事実に対し国々が同じ視線を持っているとは限らないが、記憶し続けなければならないことはあるはずであろう。本研究では関東大震災に対し、後世に残すべき歴史事実をどのように語るべきか、もしくは何が語られていないのかを日韓の物語を比較しながら探り、関東大震災を現代の我々がどう受け入れるべきかについて考えたい。

1 石井正己『文豪たちの関東大震災体験記』小学館、2013年

2 大本泉「関東大震災と近代文学—芥川龍之介と正宗白鳥を中心として—」『仙台白百合女子大学紀要』17巻、2013年

## 4. 宙吊りの生活：朴泰遠「自画像3部作」読解

専修大学（講）相川拓也

本発表は、朴泰遠（1910～1986）のいわゆる「自画像3部作」の読解を通じて、1940年代の植民地末期に小説家であることとはどのような経験だったのか、という問題を探究する。朴泰遠の「自画像3部作」とは「淫雨」（『朝光』1940年10月）、「偷盗」（『朝光』1941年1月）、「債家」（『文章』1941年4月）の3作を総称したもので、各作の発表時に作家によって「自画像」という標題のもとでの連作であることが明示されている。専門の小説家として家族を扶養する立場にあった朴泰遠は、1940年代に入ってから多種多様な文筆活動を展開したが、中国小説の翻訳やいくつかの国策協力作品などと並んで、あらためて作家の「自画像」がこの時期に創作されたことの意味を、どのように見出すことができるかが、本発表の基底を成す問いである。

「自画像3部作」は、京城郊外の敦岩町に新築の家を買った作家「わたし」の身边に起こる諸問題を題材としている。「淫雨」では雨漏り、「偷盗」では盗難の被害を受けたことが詳細かつ克明に記述され、「債家」では、家の購入に要した借金を返済する過程で、ふた月分の返済額を支払いの人間が横領して逃亡したことにより生じた危機がテーマとなる。「自画像3部作」に関しては、日中戦争の開始にともなう種々の統制や同化政策の強化、京城の市域拡大とそれによる不動産投機ブームなどといった、1936～1938年ごろを起点とする植民地末期の社会状況の変化を踏まえて、作品内で扱われる出来事の意味を歴史的に位置づける作業がすでに蓄積されており、朴泰遠が見せた時代認識に対する深度ある議論がなされている。

本発表ではそうした先行研究の成果を踏まえつつ、「自画像3部作」に共通する生の脆弱性に対する不安という切り口から、新たな読解を試みる。作品内で詳述される雨漏りをめぐる対応、盗難被害への対処方法、借金返済をめぐる問題への取り組み方や、それらと並行する娘の幼稚園入園準備の様相など、具体的なエピソードのテキスト分析を通じて、多岐にわたる懸案が解決されないまま積み重なっていく「わたし」の生活のありようを明らかにする。生活をめぐる諸問題が解決されないまま宙吊りにされ、不安と緊張が終わる見込みなく持続していくという状況は、植民地末期の小説家が置かれた執筆の現場に対する率直な苦境の報告としての意味を持つ。同時に、都市郊外に暮らす核家族という新しい生活様式がもたらした複合的な経験に対する歴史的省察でもあるという点で、朝鮮近代文学におけるモダニズムの新たな展開の一事例としての意義を見出すこともできるだろう。

## 5. 尹東柱の自筆詩稿から見る漢字の特徴とその効果

東京外国語大学（院） 金 雪 梅

本発表は『写真版 尹東柱自筆詩稿全集』（王信英、沈元燮など共同出版民音社、1999）を手がかりに、尹東柱の詩の中の漢字の特徴とその漢字を用いたことによって、生まれる詩的效果を考察する。

「朝鮮」の植民地期に「間島」で生まれ育った尹東柱は終始朝鮮語で詩を書いた。そのため彼の詩の中で見られる多くの漢字は、朝鮮語の読み（表音文字）で書いた漢字である。しかし、その漢字使用には、中国語と日本語の漢字の混同が見られ、これは彼が受けた学校教育と、当時の時代状況により、自らの意志で学んだことではないが、少なくともできた三つの言語（朝鮮語、中国語、日本語）の影響があった。

1917年尹東柱は「北間島」明東村で生まれ、民族意識が強い明東小学校を卒業した後、1931年の6年生の時に従兄弟の宋夢奎と共に大拉子中国人小学校に一年間勉強する。その後間島の中心地である龍井の恩真中学校に入学するが、1932年「満洲国」が成立し、日本は「五族協和」を掲げながら、「満洲国」内で日本語教育を強化した。1935年尹東柱は平壤の崇実中学校を自ら退学をし、その後再び故郷龍井に戻り日本人が経営する光明中学校に編入する。

このように尹東柱が朝鮮の延禧専門学校に通う前の教育言語は多様である。学校という場所は近代国民意識を教育する重要な場として、学校で使用する言語は詩人の意識形成に大きな影響を与える。民族意識が強い人たちが民族教育に力を入れた明東小学校では朝鮮語で教育を受け、また6年生の時に通っていた中国人小学校では中国語で、そして恩真中学校と光明中学校では日本語で教育を受けた。その後英文学を専攻し、フランス語を独学するなどしたが、彼の中には、少なくとも三つの言語（朝鮮語、中国語、日本語）が「自由」に越境できたと言える。そのため、尹東柱は詩を完成させる中でハングルと日本式漢字、中国式漢字、日本語でも中国語でもない漢字を繰り返し使って修正していったのを彼の習作ノートを通じて見ることができる。

具体的は漢字使用が多い「このような日」（1936）や「寒暖計」（1937）などは概念的な漢字が多く、その中の単語の特徴や自然性、単語と単語の関係は、詩のイメージや風景を再認識させる。一方全ての詩に漢字語を書いたのではなく、「序詩」や「新しい道」のような彼の代表的な詩と童詩には漢字使用が見られないのも、詩人の朝鮮語への愛着と漢字使用の意図が窺える。

本発表は、当時の朝鮮語使用禁止など厳しい統制の中、終始朝鮮語で詩を書き続けた尹東柱が「多言語」の環境の中、漢字使用を通して見られる言語の影響と、そのような環境の中、いかにして自身の朝鮮語詩の言語を構築し、形成していったのかについて試みたい。

## 6. 金芝河と韓国演劇 —1970年代日本演劇の新たな他者として—

早稲田大学（講） 金 牡 蘭

本発表は、日本における朝鮮（韓国）演劇との交流史という文脈のなかで、1970年代に起こった金芝河ブームを再照明しようとする試みである。

金芝河が故人となって以来、彼が日本の社会文化で大きな注目を集めていた70年代の状況を改めて振り返る研究が登場している。しかし、それらは運動の時代のアイコンとして金芝河に注目したものであり、実際金芝河と日本を繋ぐ一つの大きな媒介となっていた演劇の分野にまで視野を広げたものではない。これは、当時日本の金芝河受容が、詩や散文の翻訳出版だけではなく、戯曲の翻訳や上演などの演劇的な実践としても活発に現れたことを考えると、不自然にも映る現象である。韓国では、金芝河らのマダン劇運動が日本の演劇人唐十郎との交流によって触発されたことに注目した論考も発表されているが、反対に当時日本の演劇界において注目された金芝河の存在について、その意味と役割を考察した先行研究は皆無に近い。

このような状況の中で本発表は、まず日本における金芝河作品の上演を整理し、それらがどのような文脈の中で成立し、どのような舞台として実現したか、またどのような評価を得られたかを概観する。それを通じて、1970年代の日本演劇界という文脈の中で、金芝河が何を意味したのか、あるいは何を意味し得なかったかを考えていく。次に、それらの諸現象を日本演劇と韓国演劇の新たな関係性が作り上げられる象徴的な事件として位置づけ、通時的な観点から金芝河ブームを再考する。金芝河と彼によって代表される韓国演劇は、日本の新劇（近代劇）が時代的な使命を失ったかのように見えた1970年代に、突如として立ち現れた新たな他者であったといえる。本発表はこの点に注意し、当時この韓国演劇という他者への視線が、帝国日本の時代に形成された植民地朝鮮演劇への視線とどのような不／連続を見せているかを考察する。

以上の作業を通じて本論は、1970年代の金芝河ブームを、演劇を中心とした日本と朝鮮（韓国）の文化交流の中で歴史化することを目指す。それによって、金芝河という一個人の受容史という次元を超えて、朝鮮（韓国）演劇と日本演劇が織りなしてきた接触と交渉の歴史を批判的に振り返る機会を提供したい。

# 7. 第三世界文学としての「民族文学」論と ポストコロニアリズム ：二つのポストコロニアルの競合と錯綜をめぐって

京都大学（助） 夫 鍾 閔

ポストコロニアリズムは、1970年代後半以降ポストモダニズムとポスト構造主義の文脈で提起された用語であり、西洋の歴史主義の諸形式に対する批判を基礎づける一つの方法として一般的に認識されている。しかし、戦後直後の「ポストコロニアル国家」といった用法に見られるように、「ポストコロニアル」という言葉自体は、このような思潮が登場する前に、第二次世界大戦以降から旧植民地の独立以後を意味する用語としてすでに存在していた。この用語は、時には第三世界主義の潮流の中で「反植民主義的（anti-colonial）」と同一の意味で扱われ、その文脈で第三世界に現れた抵抗活動としてのナショナリズムと親和的な修辭でもあった。しかし、1970年代後半からエドワード・サイード、ホーミ・バーバ、ガヤトリ・スピヴァクといった思想家たちの出現により、「ポストコロニアル」の意味は今日の用法に転化される。とはいえ、前者の契機と後者の契機が決して無関係ではないという議論は、これまで何度も試みられてきた。

しかし、日本のポストコロニアリズムの主な議論でもわかるように、ポストコロニアリズムの観点から反植民主義的ナショナリズムを擁護することはポストコロニアリズムの理論的側面によるものというより、あくまで状況的なものとなる。特にこの観点を強く堅持するならば、植地的な特殊状況を考慮してナショナリズムを周縁者の抵抗として暫定的に評価できるとしても、両者の「ポストコロニアル」の問題意識が事実上異なることを認めなければならない。ところで、このような観点こそ、1990～2000年代韓国においてポストモダン的なポストコロニアリズムが受容されるにあたって、論争になった部分であった。

今日の韓国のポストコロニアリズムの議論の主流は、ナショナリズムとの関係において二つのポストコロニアルが矛盾するのではなく、むしろ両者が理論的に交差する複雑な関係を示している。もちろんこのような展開は、単にポストコロニアリズムの理論的整合性を追求しようとしたために生じた結果ではない。このような背景には民族をめぐる韓国固有の文脈があるが、本報告では民族文学論に焦点を当て、韓国の近現代史の政治状況との関係において民族がどのような形で提示され、最終的にはポストコロニアリズムとどのような関係を結んだのかについて考察する。特に、1970年代に民族文学の意義を第三世界論との関係で提示した白樂晴や金鍾哲の議論から、彼らの民族文学論の影響を受けながらポストコロニアリズムの再解釈を行なった河最一や楊鍾根らの2000年代までの議論を取り上げ、民族文学論の歴史的背景を辿りながら、西洋のポストコロニアリズムが受容される韓国の文脈において具体的にどのような変容があったのかを検討する。その後、これがたどり着いたポストコロニアルの理路を考察すると同時に、最終的に周縁の思想としてのポストコロニアリズムの問題意識に照らしながらこれらの思想の意義と限界を明らかにする。

## 8. 古典童謡の解釈方法

慶熙大学校 岡山善一郎

古典童謡とは、王朝時代の童謡、つまり、古代より朝鮮時代までの童謡のことを指す言葉である。古典童謡は、必ずと言っていいほど、歴史的な事件と結び付いて伝えられている。それ故に古典童謡は史書の中に収録され伝えられているのである。

韓国における古典童謡の研究では、童謡を、歴史的な事件を予言する(讖)うた(謡)、すなわち、讖謡として捉えていることから、古典童謡を讖謡とも言っている。このような見解は、事件が起こる前に童謡が存在したという、文献記録に沿った解釈である。童謡を、ある事象の徴候として、またはある特定の人物が現れるという予言として捉えていたのである。従って、童謡の主体も歴史的な事件そのもの、或いは歴史に登場する人物となる。

ところが、童謡という名称は古代中国で生まれたものであり、『漢書』以来の中国の正史では、童謡を「五行志」の中で扱っていて、更には五行思想に基づく童謡発生論まで記されているのである。『漢書』によれば、「五行志」には災難に関する記事が収録されているが、童謡は、その災難のうちの一つであるという。そして、そこに収録されているすべての災難は、君主の失政によって現わされたものと考えられていた。また、前漢の儒学者、董仲舒は災異思想に基づいて、童謡を、天が君主に示した天譴であると捉えていた(岡山、2023年)。このような古代中国の童謡の発生論や童謡観の影響を受けて、『高麗史』「五行志」には童謡論や童謡観が記されている。しかし、研究者たちは、これまで、こうした『漢書』「五行志」の童謡論や童謡観を韓国の童謡研究に取り入れることを等閑視してきた。

『漢書』「五行志」の童謡論の観点から童謡を見ると、童謡はある事象や人物を表す徴候や予言として現れるのではなく、君主の失政を咎めるための天譴として、君主に自らの失政を修省させるために現れるものということになる。そうだとすれば、童謡を発生させる原因となった君主の失政とは一体どのようなものなのか、という問題も考えなければならないだろう。董仲舒の災異思想や『漢書』「五行志」によれば、詩妖(童謡)は「金」の逆理現象によって現れるものだという。具体的な五行の逆理行為としては、君主が戦を好み、辺境を侵して諸侯を殺し、人民の命を軽くみなし、賄賂を貪る行為などがある。

これら古代中国の童謡論は、果たして韓国の古典童謡にも当てはまる論理なのだろうか。『三国遺事』や『高麗史』に収録されている童謡を再検討しながら、中国と韓国の古典童謡論や童謡観の相違点を明らかにすることが、本発表の目的である。各童謡の解釈については、発表の場で示していく。



## 9. 高橋亨の朝鮮文学研究と今後の発展について

近畿大学 山田恭子

本稿は高橋亨（一八七八～一九六七）の朝鮮文学研究の問題点と、今後の発展について示唆するものである。

高橋亨は近代以降、朝鮮古典文学分野における最高峰の日本人研究者であったといえる。しかしその研究については時代性とも相俟って、いくつかの問題点を含んでいる。

まずその一は、彼の研究の原点が日本の朝鮮植民地経営のためのものであったという点である。それは、一九〇六年、「韓国の文学 春香伝の概説」、一九一〇年、『朝鮮の物語集附俚諺』の「自序」にも表明されており、彼の文学研究は、その国を統治する側として、「為政者社会政策者の経営施設への貢献」という目的によって達成されたものである。であれば、戦後の高橋亨の文学研究について、戦後のそれとの相違について考察されなければならないであろう。

その二は、彼の古典文学研究が思想、宗教、文化など多岐に及ぶため、その文学概念が、誤解されて伝わった点である。高橋亨の文学研究はまず、朝鮮語に対する関心からハングル古典小説へ、そして仏教、儒教から政治思想へと幅を広げておりそのことは彼の著作からも明確である。また経学院（成均館）提学を兼任していたともことを考えれば、儒教とそれに伴う政治思想に関心を持ったことは当然である。よって彼の京城帝国大学の文学講義もそれと関係するもので占められている。これに対し、「朝鮮文学」とはハングルで書かれた文学と主張した李光洙（一八九二～一九五〇）や、それを記録した金思燦（一二九二～一九九二）らがいる。李光洙の主張は、日本の明治時代に盛んに起こった言文一致運動や西洋の文学概念を取り入れた近代文学観に影響されたものではないかと考えられる。さらには植民地として日本に同化していく憤慨や悔しさ、近代以前の朝鮮文学に対する否定観も混じていたのかもしれない。

しかしながら、そうした近代以前の漢文で書かれた朝鮮古典文学もまた紛れもなく朝鮮思想、宗教、文化を物語るものであり、すべてを包括して研究した高橋亨の研究は当然のことながら重要な位置を占めるものだとわねばならない。

よって、その三は、このような多岐にわたる高橋亨の文学研究を今後われわれはどのように受け止め、更には発展させていくべきか、という点に注目が置かれるだろう。

朝鮮古典文学はおおむね中国の伝統古典文学観の「載道之文」に深い影響を受け、その具現化は『三綱行実図』すなわち「忠・孝・烈」によって表現される。また李珥『擊蒙要訣』、退溪・高峯「四端七情分理気往復書」、正祖『弘齋全書』、徐居正『東人詩話』、朱熹「無極太極説」など、すべては古典文学を理解する上で重要な基礎教養である。特に朝鮮時代の古典文学を研究する際は、それらを踏まえた上で、その内容が他の文学とどのような関係にあるのかを考察することも、さらに深い研究を進めていく一つの方法であろう。

# 1. 朝鮮半島をめぐる蘇木の道 —15世紀における朝明間の流通を中心に—

九州大学(院) 洪 寅 植

本報告は、朝鮮半島をめぐる蘇木の道、とりわけ15世紀における朝明間の流通について考察するものである。

蘇木は東インド原産の樹木であり、古くから赤色の染料の材料や漢方薬として用いられてきた。胡椒と同様、蘇木は東南アジアの代表的物産として東アジア海域に多く流通され、その様子は『歴代宝案』や『朝鮮王朝実録』などの史料から窺える。モノの流通は、その流通地域の政治的状況と関係しているため、当時の政治的状況や秩序を垣間見たり、政治的な秩序の効力を傍証したりすることができると考えられる。蘇木は、東アジア海域において多く流通されていただけに格好の素材であるにもかかわらず、これまでどころかという等閑視されてきた。

蘇木に関する従来の研究は、史料の残存状況のためか、中世の研究成果が著しく、両国史の貿易の側面から蘇木を貿易品の一つとして捉える傾向にあった。よって、琉球王国の中継貿易の視座を始めとして、日明や朝日貿易などの視座による、個別的な成果が散在している。従来の研究の到達点は次のようにまとめられる。まず、明朝の海禁政策と朝貢貿易体制の下、琉球が東南アジア諸国に赴き、明朝への朝貢品とかこつけて蘇木を始めとする東南アジア物産を入手し、東アジア各地に流通したことが挙げられる。また、琉球王国が仕入れた蘇木は、博多商人等の活動によって朝鮮や明朝に再輸出された点と、朝鮮に輸入された蘇木が明朝にまで流された点も指摘されている。

しかし、従来の研究では、明朝の海禁令と朝貢貿易体制によって東南アジア物産が従来(東南アジア—中国—朝鮮半島—日本列島)と異なる流通様相を見せるようになったと述べているが、それを「モノに即して」確認する作業が疎かになっている。また、朝明間における蘇木の流通についても詳しい考察を行っていない。そこで、本報告ではこれらの問題に取り組みたい。

蘇木は、少なくとも統一新羅期には半島に将来されており、それは『三国史記』に見える蘇芳典という官署・正倉院所蔵の毛氈・「買新羅物解」から推断できる。特に、「買新羅物解」からは、蘇木が朝鮮半島から日本列島に伝わっていたことも窺える。高麗期においては、『高麗史』・『老乞大』・『吏文』から蘇木の輸入が確認できる。これらを通じ、「モノに即して」朝鮮以前における蘇木の半島将来が検討できる。

朝鮮成立以後、朝廷は蘇木が朝鮮の所産ではないため禁品として指定し、明朝への輸出を防ごうとした。それにもかかわらず、蘇木は密貿易によって明朝に流されたと推測される。密貿易以外にも、使臣館貿易によって蘇木が合法的に明朝に輸出されることがあった。ただ、これは明使の要請など、やむを得ざる事情に起因していた。

以上から、高麗末期から朝鮮初期にかけて朝鮮半島をめぐる蘇木の道に変化があったことを、「モノに即して」確認する作業を行っていく。

## 2. 17・18世紀の朝鮮農業水利の発展 —水稲灌漑移植法と小農民—

本会会員 菅野修一

本報告は朝鮮後期における農業水利の発達と水稲灌漑移植法などの普及による小経営農民の成立とそれに伴う諸問題についての考察である。

16世紀末から朝鮮は日本と女真による侵略により戦場となり大きな損害を受けた。この損害を克服するためには農業生産の回復が必要不可欠であり国家の財政確保のためにも急務であった。

さて17・18世紀の王朝編纂史料には各種屯田の設置がみえる。同じく、河川水利用の灌漑施設の川防＝「湫」の築造がみえる。そして郡県民を動員してこれらの水利施設を築造した地方官は、中央政府から顕彰され昇進した記録もみえた。

ところでこれら王朝編纂史料には、地方民による中・小規模の灌漑施設設置については、殆ど言及が無い。しかし中央の記録に残らないにしても、農地復興・開発とこれらの施設設置は時代の趨勢であった。故に王朝政府は「堤堰事目」・「堤堰節目」等を発布して、大規模水利施設は勿論、地方民独自の中小施設に対しても築造と管理運営の規則・細則を定め、また水利を巡る各種の紛争にも対処できるように指針を示した。

また「湫」等の維持管理には地方両班の存在が重要だった。両班は「籬底」の下層民を水利施設修築に従事する「湫軍」として使役した。湫軍は一般民からなる、いわゆる「烟軍」である。作業は春耕以前の河川渇水期を利用した。また日常的な用水分配等は下級両班が現場の「監官」として管掌し、収入を得たのである。

しかし18世紀中期には両班配下の農民がその下を離れる傾向が強まった。成長しつつあった小農民が新「里」（新集落）を形成して移住する傾向がみえた。また屯田を設置した機構が新「里」を設け移住させる場合もあった。そして国家は移住した農民に対する旧上典の使役を禁止した。

ところで史料には灌漑移植法においては従前の農法に対して二倍の生産力を持ち、労働力が夫婦二人程度である単婚小家族においても、自立的再生産が可能であったと記される。

朝鮮時代の農民層は両班層が長子相続制に転換しても前代からの均分相続の慣習を保持した。故に相続した一人当たりの耕地は代を重ねるほど零細化した。しかし土地生産性と労働生産性の上昇、また相互扶助的並作半収慣習などによって農民の小経営は維持可能となった。ゆえに自立的小農民は両班の使役を嫌って新集落に移住したのである。

18世紀後半には用水を巡る紛争の質が変化した。この時期の人口増加は耕地の拡大と水田化を引き起こし、特定地域への水田の集中・稠密化を招き灌漑用水は恒常的供給不足に陥った。

またこの時期、耕地は用水が得やすい海拔が低く河川に近い土地に移動する傾向がみえた。その結果、河川氾濫の度に覆沙や浦落の被害が顕著となった。自然災害に対する耐性が弱化した。

「19世紀的危機」につながる諸問題が生起したのである。

### 3. 講信参判使から見える近世日朝関係

舞鶴工業高等専門学校 牧野 雅 司

明治維新期、近世日朝関係の不可欠の構成要素であった対馬藩の動きが、その変容を促す一つの要因となった。では、こうした動きは幕末期にも見られるのであろうか。本報告では、一八六七（慶応三、高宗四）年に対馬藩が朝鮮に派遣した講信参判使の準備過程と外交交渉を検討することで、近世日朝関係が抱えた問題点を明らかにしたい。

幕末期の対馬藩は、ポサドニック号事件によって防備態勢の不備を痛感し、一方では貿易の衰退による財政窮乏もあり、幕府に援助要求運動を行った。このなかで、幕府に対して過激な朝鮮進出論を建議し、それとあわせて三万石の経済援助を実現しようとした。この計画は老中板倉勝静や勝海舟の失脚、対馬藩内での内訌により消極化されるものの、一八六五（慶応元、高宗二）年に板倉が老中に復帰することで再浮上する。翌年一二月、対馬藩は江戸幕府による「朝鮮御取開」のため講信参判使を派遣することを決定する。

この講信参判使に課せられた役割は、「両国交際之儀者兼而御規則茂候処、宇内之形勢不容易時機ニ至益信義相立」てることにあり、幕吏渡韓を実現することにあつた。しかし、この準備の過程で、朝鮮半島での丙寅洋擾発生情報が日本に入ったため、幕府の対朝鮮外交に対する動きが活発化した。また、同時期に、日本が上海で火輪船を築造し、朝鮮に攻め込もうとしているとする八戸順叔の発言が清から朝鮮に伝わり、それに対する照会が朝鮮から対馬藩に行われるなど、事態は複雑化した。結局、講信参判使は幕府倒壊により幕吏渡韓そのものが消滅し、一八六八（明治元、高宗五）年一月にその任を終えることとなった。

こうした結末から、従来この講信参判使はそれほど注目されるものではなかったが、興味深いのは、講信参判使は幕吏渡韓と同時に対馬・朝鮮間の貿易の規則を変更する要求を入れ込んでいる点である。一八六七年に対馬藩は、朝鮮からの公貿易入送米の支給が遅れ、また米ではなく大錢で支払われている点を批判して攔出を行っており、講信参判使に館守・裁判・代官が直接東萊府使と接見できるよう求める書契を別に附託している。つまり、この講信参判使は、三万石の援助を得るために幕府からの要求を実現しようとする側面を持つ一方で、対馬と朝鮮との関係を改変しようというねらいも含んだ外交使節だったのである。その意味で、この講信参判使を分析することは、対馬藩が自藩を含めた近世日朝関係をどのように改変しようとしたのかという点を明らかにする一つの材料となるはずであり、それは近世日朝関係の抱えた問題点を解明することにつながると言えるだろう。

本報告では、まず講信参判使の準備の過程を整理し、幕府・対馬藩それぞれの思惑を明らかにしたい。そして、講信参判使による倭館での交渉を分析し、対馬藩が近世日朝関係に対して抱く思惑を明らかにしていきたい。

## 4. 啓明大学校所蔵『續三綱行實圖』について

東京大学 澁谷 秋

啓明大学校童山図書館は二つの『續三綱行實圖』が所蔵され、どちらも重刊本系列の刊本である。永らく韓国国内で伝本が見つかっていなかった系統の刊本であり、2008年に白斗鉉先生によって紹介されたものである。

『續三綱行實圖』は1512年に編纂がはじまり、1514年に刊行された3巻1冊の木版本である。その名の通り『三綱行實圖』の続編として編まれ『三綱行實圖』以降の孝子、忠臣、烈女、の事績を収録し、庶民の教化を目的とした教化書である。

『續三綱行實圖』は1514年に刊行された原刊本系列の刊本とその後2度に渡って重刊された重刊本系列の刊本がある。一度目の重刊本は1560年時点で『三綱行實圖』と『續三綱行實圖』が改印を命じられている実録の記事があるが、現存する刊本からわかる刊行年は1580年であり明確な刊行年は分からない。二度目の重刊本は巻末の刊記から1727年に箕營で刊行されたことが明らかになっている。本発表で取り上げる啓明大学校所蔵本は1560~1580年に刊行されたと考えられる一度目の重刊本に分類されるものである。

啓明大学校所蔵本が分類される一度目の重刊本系列の刊本には4類7部があり、現存する刊本のなかで分類される刊本が最も多い種である。そこには台湾の国家図書館所蔵本や日本の国会図書館所蔵本といった早い時期から知られるものが含まれるが、版の前後関係や系統関係に関する研究はほとんど行われてこなかった。

発表者が検討した結果、一度目の重刊本は刊行時期が早い順に第Ⅰ種刊本<B1>、第Ⅱ種刊本<B2>、第Ⅲ種刊本<B3>～<B6>、第Ⅳ種刊本<B7>に分けることができ、啓明大学校に所蔵される二つの刊本は第Ⅲ種刊本に分類されるもののうち、<B4>と<B6>にあたることが分かった。しかし第Ⅲ種刊本に分類される他の刊本とその内容を比較してみると啓明大学校所蔵本は補版が多く入り、一部は先立つ版より古いと考えられる張も含まれていることが分かった。

本発表ではB第Ⅲ種刊本のなかでの啓明大学校所蔵本の立ち位置を検討する。

## 5. 植民地朝鮮社会における胎教と母性言説 — 「女性教育論」「民族改造論」「朝鮮学」振興運動」との 絡み合いを中心に—

奈良文化財研究所 扠 素 妍

韓国において胎教は、現在の新聞・雑誌で多く記事化される程、一般に普及されていると言える出産風習である。本発表は、この胎教という風習が現在韓国社会へ根強く伝存できた理由をさぐろうとするものである。そのため、植民地になる前の開化期から一九三〇年代まで、主に朝鮮語新聞に掲載された胎教言説を、そのような言説の外部要因にあたる思想や社会運動との関係の中で分析する。さらに、その胎教言説と母性言説との関係を読み直し、植民地朝鮮の「生政治」における風習としての「胎教」の位置を確認する。そこで、植民地朝鮮の「生政治」構造に「女性教育論」「民族改造論」「朝鮮学」振興運動」といった思想及び社会運動との関係からアプローチする。その理由は、これらの思想及び社会運動が当時の朝鮮社会に社会の進むべき方向性を提起したものであったためである。そして、胎教言説が「妊娠した体」を如何に位置づけて、朝鮮社会における「妊娠した体」への統制を如何に方向づけたのかを把握する。

その結果、次のようなものが垣間見えて来た。開化期に女性教育の必要を唱えた論説では、賢母という役割が女性教育の前提になっていて、女性教育の必要も賢母として胎教を行う女性を養成するためだと論じられていた。また、一九二〇年代の女性解放議論が活発になる中でも女性教育は女性を賢母として養成するためだと主張され、そこで胎教する母としての役割が強調されていた。一方、同じ時期、「民族改造論」では「母になること」が民族の改良のためであり、胎教はその手段の一つとして挙げられた。そして、民族改造論とは対立しているように見える非妥協的な民族主義者の文章でも「種族繁栄策における実に世界に卓越した」方法として胎教は肯定され、正しい母になる方法として正当化されていた。

以上のように、「妊娠した体」を統制する構造を築き上げた言説においては、医学や衛生学などの専門家のみが参加していたのではなかったこと、むしろ、一見したところ互いに競合しているように見える社会の様々な動きが、胎教に関する言説を通じて、「妊娠した体」に対する統制を肯定する言説を繰り広げていた。

さらに、このような言説は社会における「妊娠した体」への観察と監視を容認し、妊婦自身も自分の体を観察して監視する必要があると要求されたことを示唆する。また、それは「母性」を神聖なる女性の天職であるという当時の「母性言説」に協調する形で、「衛生」「児童心理学」「医学」など近代の学知の言葉を用いて、統制に当為性を付与する。要するに、胎教言説は「妊娠した体」を、優秀な子供を得るために、その社会において観察・監視・統制しなければならない対象として位置づける役割を果たしたと言える。そして、当時知識人が繰り広げた胎教言説は「妊娠した体」を統制しようとする近代の生政治を構築する一つの歯車でもあったと評価できる。

## 6. 崔鉉培の思想形成における京都帝国大学哲学科の位相 — 『朝鮮民族更生의 道』 を中心に —

東北学院大学 関 東 曄

本発表は、朝鮮語学者・教育哲学者として広く知られる崔鉉培（1894～1970）の初期の著作『朝鮮民族更生의 道（以下、『更生の道』）』（初出：1926年）を、彼の京都での留学生生活を踏まえたうえで読みなおすことを試みる。

これまで崔鉉培に関しては朝鮮語学の業績を取り上げる研究が多く蓄積されてきた。思想史的な文脈においては、1930年代後半以降の興業倶楽部事件（1938年）や朝鮮語学会事件（1942年）に代表されるように、彼の民族主義的思想・運動が評価されることが多く、『우리말본』『한글갈』とともに植民地期の3大著作の一つとされる『更生の道』が書かれた1920年代については、その前段階として位置づけられてきた。いっぽうで、同時期に崔鉉培が京都帝国大学文学部哲学科にて留学していたことについては学歴情報としてのみ言及される傾向があり、『更生の道』が同大学大学院在学中の1925年に書かれたことの意味、言い換えれば、崔鉉培の初期思想の形成における京都帝国大学哲学科の位相についてはほとんど注目されてこなかったように思われる。

そこで、本発表では、崔鉉培自身が『更生の道』を指して「日本における10年間の留学生活の贈物」と回顧していることに注目し、次のような二つの課題を設定する。一つは、彼が京都帝国大学哲学科で何を学んだのか、であり、もう一つは、その知的経験が彼の著述活動——とりわけ『更生の道』の執筆——においてどのような影響を与えたのか、ということである。具体的に言えば、前者については、彼がどのような修学環境で知識を得ていたのかを探るべく、当時の京都帝国大学哲学科の講義内容や履修状況を再構成し、小西重直、朝永三十郎、西田幾多郎など、「京都学派」として近代日本思想史の中で大きな足跡を遺した当時の教授陣の思想状況とともに考察する。後者については、崔鉉培の京都帝国大学哲学科での知的経験を踏まえたうえで、『更生の道』の内容——とくに哲学的思考の表現——について、これまであまり顧みられてこなかった同時代日本の思潮との関連において読みなおす。そのさいにキーワードとなるのは、新カント派、大正生命主義、人格主義などである。

このように本発表では、崔鉉培の民族主義思想の底流に日本を経由する西洋哲学の知が流れていることを確認し、その思惟構造を解析する。こうした作業を通じて、大正期日本思想史と交叉する、1920年代の朝鮮思想史の一断面をとらえ、西洋—日本—朝鮮における近代知の屈折と展開・変容について思考を開いていくための足掛かりとしたい。

## 7. 韓国ドラマから見るジェンダー意識への向上

福岡大学 羅 義 圭

近年、韓国でフェミニズム運動が活発化し、若い世代の女性を中心にジェンダー・センシティブな感覚が広く共有されるようになった。2016年5月の「江南駅通り魔事件」や同時期に梨花女子大学で起こった大学当局と対立する女子学生たちの籠城闘争がきっかけとなっており、同年10月に出版され、のちに映画化された小説『82年生まれ、キム・ジヨン』も韓国社会を大きく揺さぶった。

一方、2020年、感染症対策による在宅での余暇へのニーズが高まり、動画配信サービスを介し、日本において第4次といわれる韓流ブームが始まった。『愛の不時着』や『梨泰院クラス』は南北問題や格差の拡大という韓国の社会問題への理解を深めるとともに、韓国において人権への関心が高まっていることを示す材料となったのではないだろうか。

特に、韓国ドラマは女性視聴者が多いだけに、こうした「人権への関心」が「ジェンダー」問題から始まったのではないか、しかもドラマは社会の変化の妥当性を反映するものだと発表者は思われる。本発表では、主人公やその仲間が「女性」にあたる属性を持ち、あるいは既存の社会秩序の中で弱者という位置づけになり、困難を抱えながらいかに生きるかを描いて高評価を得た韓国のドラマを事例として、2018年放映の韓国ドラマ『別れが去った：マイ・プレシヤス・ワン』と2022年放映した『ウ・ヨンウ弁護士は天才肌』を取り上げたい。この二つの作品は、これまでの家父長制に強く根づいてきた韓国社会を批判し、多様性を反映しながら政治的正しさを、より積極的に取り入れ、現実以上に多様性を打ちだしているのだ。

さらに、2014年放映した『ミセン』を取り上げると、2016年を境に韓国社会の「ジェンダー意識への変化」が浮き彫りになると思われる。しかし2000年代から現在までの韓国の社会的あるいは人口動態的な変化、すなわち核家族世帯の増加、女性の高学歴化や晩婚化、少子高齢化、終身雇用制の崩壊などが多少なりとも影響していることも無視できないだろう。

先行研究では、主にドラマ作品の内容面に重点をおいて論じられている山下(2013)のように、韓国の「ジェンダー意識」を作品で表れたイメージに着目している研究はあるが、本発表では韓国の「恨(한：ハン)」という視座を通して「私たち(우리：ウリ)」の物語を編み直す可能性への糸口を見つけることで常に「わたし」が他者との関わりによって揺り動かされる受動的な存在であることが浮き彫りにできるのではないだろうか。「わたし」を文化的属性の「固定化」から解き放すきっかけを創ることが「多文化共生」への糸口になる。